
コードギアス Kingame of love and hate

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス Kingame of love and hate

【Nコード】

N39920

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

コードギアスのミレイとルルーシュカップリングです。

リクエスト第四段です

(前書き)

結構長くなっちゃったかな？
てか11538文字とか初めてかも (笑)

日本がブリタニアに敗戦してから7回目の秋が訪た。今年の夏は例年以上に長く、その勢いは9月に入ってもとどまる事は無く、10月になって穏やかな気温になりようやく過ごしやすくなる。

ここアッシュフォード学園に通う学生の、夏休みボケもようやく抜けてきた10月の昼下がり。まだボケの抜けていない金髪の美少女ミレイ・アッシュフォードは、クラブハウスにある生徒会ルームにメンバーを呼び集めて、また下らない遊びを興じ様としていた。

生徒会ルームに呼ばれたメンバーといえば、おなじみの生徒会メンバーで青髪のリヴァル、栗色の長髪のシャーリー、赤い髪が印象的なカレン、緑色の三つ綱をしているニーナ、敗戦国の日本人でありながら手続きをしてブリタニア人を名乗る事を許可された名誉ブリタニア人のスザクであった。ミレイは生徒会の会長であり、いつもはお気に入りの黒髪の少年ルルーシュもこの場にいるはずなのだが、盲目で足の不自由な妹を迎えに行っている為、現在ここにはいない。

「さあ、みんな♪今日は王様ゲームやりましょう」

そう言うてにやりと笑ったミレイは手際よくゲーム用の棒を人数分準備していた。その棒はすでにミレイの右手に握られており、勢い良くみんなの前に突き出す。この笑顔の時には、何を言っても無駄だということを理解している全員は、嫌々ながらもその棒を引き抜く。

抜いた棒の先に書かれている色や数字を確認する一同は、凝視す

るあまり一瞬生徒会ルームに静寂が訪れた。その均衡を破ったのはこの中で一番体育会系な少女の声である。

「やったー、私王様だ♪」

そういつて喜んでいるのは栗色のロングヘアのシャーリーだった。棒の先が赤く塗られておりなぜか踊りまわっている。

——なに命令しようかなあって…、んもうどうしてこういうときにいないのよ!!! ルルは…

心の中でそう呟いたシャーリーは、すぐ感情が顔にでるため端から見たら喜んだり落ち込んだり忙しいなあと呆れてしまう。最後に落ち込んだのを見てなんとなくルルーシュの事だと悟った全員は、あえてその話題に触れないように心に決めた。珍しく全員の心がシンクロしていた…が、それを知る物は誰もいない。

「よし」

そう意気込んだ彼女は、みんなの方に振り返り口を開いた。

「それじゃあ、2番と5番の人…き、きき…キスしてください」

自分の命令とはいえ顔を真っ赤にしながら何とか声を絞り出したシャーリーに、みんなの思考が一時中断させられた。

「えええええ!!!」

もちろん大声で叫んだのは病弱美少女設定の純心なカレンである。

「ちょ、ちよつとシャーリー！キスなんて…こんなゲームで」

慌てるカレンをスザクが諫める。

「ええ、いいじゃない。僕5番だし♪相手は誰だろう」

スザクは純粹に楽しそうに満面の笑みを浮かべる。こんなに手ごわくめんどくさい相手をカレンは知らない。

「まあ、私じゃないからいいけど」

カレンはリヴァルのほうをチラ見する。目を細め恐る恐る棒の数字を確認しているリヴァルに、思わず突っ込もうかと思ったが、あくまでも病弱設定の為カレンは自重した。

「よかった」

目を細めていたリヴァルは、自分の持つ棒の番号が5ではないことに心底嬉しそうに笑みを浮かべた。

「スザクとキスなんて、夢に出てきそうだな」

「リヴァル…：僕の事嫌いなんだ」

「あ…えつと、私でもない。…：もしかしてミレイちゃん？」

ニーナの指摘はズバリであり、ミレイは観念したように棒をみんなの方へ差し出した。

「そうよ、あたしが2番」

そういつて一息もらす。

「言いだしっぺはあたしだし、王様の命令は絶対だもんねえ」

そういうながらミレイはスザクの正面に移動する。にこにこ顔のスザクは、ミレイが正面に來ると両手でその頬にそつと触れさせる。

「え？」

スザクは顔を近づけ、自分の唇をミレイの唇に重ねた。時間にしては数秒、しかしキスとしては十分に長いその行為に、驚くと共にみな硬直していた。

「ごちそうさま、会長」

「え？あ…え、ええ」

「スザクウウウ！！」

その後暴走状態になったリヴァルを抑えるために、シャーリーとカレンは必死に腕を掴みヴィバルを引っ張る。なぜそうなったのか理解していないスザクは、笑いながらリヴァルに「まあまあ」と言った。

——ど、どうしよう…ルルーシュに知られたくないなあ…。

——万が一誤解されたら…だめだめ弱気になっちゃ…ガーツツ！
！あたしガーツツ

そんなやり取りが行われていたことを知る由も無い黒髪の少年ルルーシュは、妹のナナリーの乗る車椅子を押しながら、生徒会ルームへと向かっていた。

「お兄様、もう皆さん生徒会ルームに集まっちゃってますよね」
「大丈夫だよ。みんなナナリーが来るの待ってるんだ。リヴァルな
んか、準生徒会メンバーって言ってるしな」

少し申し分けなさそうな表情をしたナナリーに、ルルーシュは笑
顔を向ける。目が見えなくても精一杯の笑顔を向けてルルーシュは
優しい声色でナナリーに答えた。

「まあ、それは本当ですか？とても嬉しいです」

心からの喜びを表情に表すナナリーの笑顔に、ルルーシュはいつ
も癒される。ルルーシュだけではなくミレイ達もナナリーに対して
は自分の妹の様に大切に思っていた。お互いの想いが通じ合ってい
るのか、生徒会メンバーとナナリーの関係は非常に良好である。も
ちろん兄のルルーシュの影響もあるだろうが、それ以上にナナリー
の優しい人柄によるものが大きい。

「今日はナナリーが久しぶりに顔を出すから、会長が何か面白いゲ
ームをするとか言ってたけど」

「まあミレイさんが？」

「ああ」

「それは楽しみです」

胸の前で両手を合わせたナナリーは、ミレイの考えているゲーム
を思いを馳せますます笑顔になった。その反対にルルーシュは少し
だけとまどうような表情を浮かべた。

——会長…変なゲームじゃなければいいけど……

ルルーシュの想像は残念ながら的中していた。なぜなら今生徒会

ルームで行われているのは、王様ゲームなのだから……。

今まさにスザクがミレイの唇にキスしている事など露知らず、笑顔で話すナナリーに言葉を返しながら二人は生徒会ルームへ向かった。途中前方からメイド服を着た女性が両手に買い物袋を下げてやってくる。ルルーシュとナナリー、主にナナリーのお世話係としてアッシュフォードが用意した冥土の篠崎咲世子であった。

「あら咲世子さん？ おかえりなさい」

聴力が発達しているナナリーは、足跡で大概の人物を言い当ててしまう。もちろん毎日世話をしてもらっている咲世子ならなおさらである。

「ただいまもどりました。ナナリー様、ルルーシュ様」

「お帰りなさい咲世子さん」

にこりと笑う咲世子の笑顔につられて、ルルーシュもつい笑顔になってしまう。アッシュフォード学園に来てからすでに5年、あまり他人に心を許さないルルーシュにとって、自らも気づかない内に安心できる相手になっていた。それはこれまでナナリーの世話をしてもらっている事、そしてナナリーが頼っている事でこの咲世子と言う人間が安全だという事を本能的にルルーシュは理解しているからだろう。

「あ、そうだ。咲世子さん、この間のあれ生徒会のみなさんで食べようかと思うのですが」

「ああ、この間のプリンセットになっていたものですね。ただいまお持ちします」

「あ、いえ。私も持ちいきます。お兄様、少し待っててください」

「ああ、わかったよ」

そういて車椅子のハンドルを咲世子に渡し、ルルーシュは二人の後姿を見送った。手持ち無沙汰になったルルーシュは窓際に寄りかかり、今後の事について思案していた。

巷で騒がれている黒の騎士団。それを纏め上げ引きいい手いるのが仮面の人物ゼロ。そしてそのゼロこそがこのルルーシュ・ランペルージなのである。今後の作戦を頭で描きながら、ナナリーを待っているトリヴァルとカレント言う珍しい組み合わせが並んで歩いていた。手には結構な寮のプリントを抱えている。

「それにしても、スザク君…まさか唇に」

廊下はよく声が響くため、まだ遠めに見える二人の声もルルーシュの耳に届いていた。

——ん？スザクが…唇？

作戦を思い描いていたルルーシュの思考を、その言葉により停止させられたルルーシュは、二人の声に耳を傾けた。

「ほんとだよ。ゲームでのキスで唇にする？…しかも会ちよってあれ？ルッルーシュウゝ何してんだこんなところで？」

「ん？ああ、ナナリーがみんなと一緒に食べるデザートを取りに行つててね」

ルルーシュは当たり障り内笑顔を浮かべたが、内心はリヴァルの言いかけた会長という単語に脳内は支配されていた。

「それより、二人が話してたスザクが…とか会長が…って何かあったのか？」

ルルーシュのその言葉を聞いていろいろ思い出したのか、リヴァルがくやしそうな表情を浮かべて肩をガクッと落とす。

「さっきまで二人が来る前に、先にゲーム始めてたんだよ。会長が王様ゲームやろうって事になって」

「王様：ゲーム」

——ええい、やはりろくな事を考えないな

表には出さないが、嫌な予感的中したルルーシュは心の中で怪訝な表情を露わにしていた。しかし、今はそれよりもその続きが気になっているため、ルルーシュはリヴァルに問いかける。

「それで？」

「それでシャーリーが王様になったんだけど、命令の内容がキスするって事になってさ」

「な……」

一瞬表情が固まったルルーシュに気づかないリヴァルは、そのままた次の言葉を続けた。

「で、会長とスザクがキスする事になったんだけど……」

思い返しただけで悔しいのか、リヴァルは少しだけ目の端が潤む。

「スザクが会長の唇にキスしたんだぜ！もうありえないでしょ。空気読まないやつとは思っていたけど、まさかあそこまでとは」

「そ、そうか」

「そうなんだよ……って悪い、この書類をとりあえず倉庫に片付けて

くるから先にナナリーと生徒会ルームに行っててよ。カレン行こうぜ」

「え、ええ」

そういつて固まっているルルーシュを置いて、二人はクラブハウスの倉庫へと向かった。二人が去っていったのと入れ違いでナナリーと咲世子が姿を現した。二人もリヴァル達にすれ違ったのか、小さかったが何言かやりとりが響いていた。

「お兄様、お待ちどう様でした」

「それでは私はお夕食の準備をしますりますので」

「はい」

そういつて笑顔で咲世子を送り出したナナリーは、先ほど別れたときとは違い少しだけ鋭利な雰囲気を漂わせていた兄ルルーシュの様子を探る。

「お兄様？」

「え？あ、ああ」

ナナリーの存在が今気づいたのか、声をかけられたルルーシュは体をビクッと反応させゆっくりとナナリーの方へ振り返った。変わらず笑顔を向けているルルーシュだが、ナナリーにその笑顔は意味が無い。なぜなら目が見えないのだから。それでも笑顔を浮かべているルルーシュは、努めて優しい口調でナナリーに話しかけると車椅子のハンドルを掴み、生徒会ルームへ押して行く。

「何かあったのですか？」

たまらず気にかけるナナリーであつたが――

「なんでもないよ。はやくしないとそのプリンがぬるくなってしま
うね」

「ええ、そうですね」

生徒会ルームへやってきたナナリーとルルーシュだったが、ルルー
シュは一步だけ室内へ入るとそこで立ち止まった。

「お、ナナリーきたね♪ルルーシュも来たし早速続きやろう♪」

嬉しそうに話すミレイにつられ、ナナリーやシャーリーも声色を
上げる。みんながそれぞれ椅子に座って準備をする中でルルーシュ
の表情は曇っていた。その理由は誰も知らない。ただ、その原因を
作っているのが目の前にいる事だけは確かである。

「会長、俺はちょっと休養を思い出したのでナナリーをお願いしま
す」

一同が「えっ」と疑問の声を上げて聞き返すが、特に返答もせず
ルルーシュは足早にこの部屋から出て行った。嫌な予感を感じたの
か、ミレイが不安そうな表情を浮かべてルルーシュを追いかけた。
いつもどおり整えられた姿勢で歩くルルーシュの後姿はまだそんな
に遠くは無いため、ミレイはあっという間に追いつきルルーシュの
手を掴む。

「触るな!!」

先ほどの声と違い怒りの籠った声をあげられ、掴んだ手を強引に振り払われた。その言葉と行為にミレイは瞬間的にある事を悟った。

拒絶

ミレイは今のルルーシュの行為で、自らがルルーシュに拒絶された事を瞬時に感じ取った。それは今までずっと思い続けてきた人なればこそ。ミレイより背の高いルルーシュの瞳は、完全に研ぎ澄まされたナイフの様に上から突き刺さる。完全に体が硬直してしまったミレイを見て、ルルーシュは声をかける事も無くただその場を後にした。

「はあ？」

辺りはすっかり暗くなり、自室に戻ってきていたルルーシュはある計画について話していた。独り言では無く一緒に部屋に住んでいる明るい緑色をした長髪の少女に向けてである。ルルーシュはシートと契約し、ギアスと言う他人を一度だけ思い通りに操る事ができる絶対遵守の力を手に入れた。このときから二人は共犯者であり、なぜか一緒に暮らしている。

「お前はバカか？」

「うるさい！！」

呆れた声のシートにルルーシュは怒声で返す。顔を歪めているルルーシュとは対照的にシートの顔は非常に冷ややかなものである。

った。

「それで…スザクとミレイ…だったか？二人がキスした事に嫉妬して、こんな事を考えていたのか…本当にルルーシュか？」

「ぐっ…いいから俺の言う通りにしろ！！」

「やれやれ、こんな嫉妬に狂った男がゼロだと知ったら、黒の騎士団は解散だな」

あきらかにからかいを浮かべるシーツに、ルルーシュの顔は怒りを増していく。

「シーツ…：…うまく言ったら今日から一週間…好きなだけピザを食べていいぞ」

「よしわかった。それなら私は何をしたらいいいんだ？」

「明日…：…」

「わかった。そんな事でピザを食べられるなら安い物だ。なんならサービスもしてやろうか」

「遠慮しておく。とりあえず明日頼んだからな！！」

翌日、ルルーシュの作戦通りアッシュフォード学園高等部の制服を着たシーツは、校舎内のある階段付近で待機していた。ここはミレイがよく通る廊下であり、毎休み時間にこうしてシーツは待機していた。もちろんシーツの合図ですぐに飛び出せるように、ルルーシュも物影に隠れている。

「ルルーシュ、来たぞ…：…ただシャーリーという小娘も一緒だが」

一瞬迷ったルルーシュだが、残りのチャンスは少ないと判断したルルーシュは決行を決意した。

「ほら、シートー頼む」

物影からでたルルーシュは、あえて二人に見えるようにゆっくりと歩いてシートーに近づく。

「まったく、こういうのはこれっきりだからな」

「ああ、すまない。だが：この作戦にお前が必要だ」

「ふふふ、まあその素直さといいピザの件もある。サービスしてやるぞ」

意地悪な笑みを浮かべたシートーは、両手でルルーシュの顔を掴むとそのまま自分の方へと引き寄せる。一瞬硬直してしまったルルーシュは、シートーのなすがままにされ二人の唇が重なった。予期せぬ事態に目を見開くも、イレギュラーに弱いルルーシュは体を動かすことができない。その姿に満足したシートーは、さらに自分の舌を強引にルルーシュの口内へと侵入させ、ただ貪る。

しばらく貪った後固まったままのルルーシュから唇を離し、自分とルルーシュを繋ぐ透明な糸を指でぬぐい取った。

「ごちそうさま。童貞ばーやの癖に、なかなか美味しかったぞ」

そういつてにやりと笑ったシートーはルルーシュの手を引っ張り、ミレイとシャーリーの視界から消えて行った。

「えゝ会長、また書類溜めてたんですか？」

半分呆れ顔になったシャーリーは隣を歩くミレイにため息混じりの言葉を投げかけた。悪びれも無く笑い飛ばすミレイは、いろんな意味で手に負えない。

「大丈夫♪みんなでやればすぐ終わるって」

「もうまたガッツの魔法とかやめてくださ……ねえ会長？」

シャーリーは正面にいる一組の男女が目に入り、思わずとなりにいるミレイに声をかけた。正面にいるのは遠目から見てもルルーシュで、その相手は明るい緑色の長髪少女でシャーリーから見ても綺麗と思う。

「あれって……ルルですよね？」

「え、ええ」

シャーリーの声に反応するも、ミレイは気が気ではなかった。なぜなら自分の知らない女子と親しげに話すルルーシュを見た事がなかったからだ。ルルーシュは生い立ち上、簡単に人を信じられず心を開かない。唯一心を開く相手としての場所に、自分がいる事を知っているミレイは少女に向けられうその表情が、自分に向けられう以上の表情に見えてしまっていた。そしてあの雰囲気は良くないことが起こるという予感を感じさせる。

「あ1？」

シャーリーの声は思わず声をあげた。少女がルルーシュの頬を捉えそのまま――

——嘘！？キス…してる。なんで？なんでそんな子と？だ、誰なの？知らないよそんな子

ミレイが自問自答を繰り返していると、ルルーシュ達はさらに濃厚なキスを繰り返していた。完全に硬直してしまった二人は、ルルーシュ達を食い入るように見つめやがて二人が走り出し姿が消えるまで、ただその場に立ち尽くしていた。

静寂に包みこまれた夜クラブハウス。そこには普段いないはずの人物がとある部屋のドアの前で佇んでいた。ドアをノックしようとする手を何度も出しては引っ込める、という事を繰り返していた。

「こんな時間に…なにか用ですか？会長」

驚きと共に声のした方向へミレイは顔を向ける。部屋の中にいると思われていた人物がそこに立っていた為、ミレイは目を大きく開き体を硬直させた。固くなった体に震える唇、そのせいで出そうと思っていた言葉が思うように喉から出ない。

「あまり規則が厳しく無いとは言え、こんな時間にやってくるなんて。さすがに日付が変わっていたら、規則違反になるんじゃないですか」

少しだけ呆れ顔を浮かべたルルーシュは、ゆっくりとミレイの方へ歩みを進めた。固まるミレイにそれ以上言葉を紡がないルルーシュは、ミレイの横を通り過ぎドアの前で立ち止まるとセンサーが反応しドアがスライドする。やっこの思いで体を動かしたミレイは、ルルーシュの方へ振り向き、ルルーシュの来ている学生服の裾を握った。

「あ、あのね…えっとお、今日ルルーシュと一緒にいた人ってさ…
…、そのルルーシュの何なの…かなって気になっちゃってさ。高
等部では見た事ない子だったから…」

不安げな表情を浮かべ震える体を必死に押さえ込むミレイの言葉を聞き、ルルーシュはゆっくりとミレイの方へと振り返る。そこにあったのは、ミレイの言葉に対してなんの感情も見せず答える気の無い冷たい目。その目に見られたミレイは、思わず体をビクッと震わせる。いつもの呆れも優しさもない、興味の無いつまらなそうな顔。初めて出会ったときの冷たく閉ざした…。

「ミレイ…お前には、関係ない…だろう」

会長と副会長と言う仮面をはずし、本来の名前で呼ぶルルーシュに放たれたその言葉は、救いを少しでも求めたミレイの心を貫き闇へと誘う。無意識の内に目から溢れだすその雫はミレイの頬を濡らし、やがて床に小さな水跡を残す。

「あ、ご…ごめんなー」

最後まで言葉を言い切ることができないミレイは、たまらずルルーシュに背を向けて逃げ出した。溢れる涙を拭う事無く、ただこの場所から一時でも早く離れる事だけを考えて。

「やはりバカだな…お前って男は。いつもつまらん所でプライドにこだわる」

自分の部屋の窓から、寮へと走って行くミレイの後姿を見ていたルルーシュに対して、入り口の壁に寄りかかりながらシーツは言葉を掛けた。突然のその声に、嫌悪の感情を表情に出しルルーシュ

はシーツの方へ体を向けた。

「いつのまに!？」

「最初からだ。あれじゃ金髪女が可愛そうだ。隠さずに言えばいいだろう? 金髪女の事が好きだと」

「黙れ魔女め。事はそう単純じゃない!!」

声を荒げるルルーシュに、シーツは呆れたさめた声で返答する。

「ふん、単純だよ。お前はあいつが好きで、あいつもお前が好きなんだ」

「黙れ!!」

「これだから童貞は手に負えん。私はもう寝る、お前は床で寝ろ」

そう言ってシーツは、ルルーシュの反論に耳を傾けずそのまま拘束服を脱ぎ捨てて布団へともぐった。

「さあ、諸君、今日も張り切って書類整理と行こう」

翌日、生徒会ルームに集まったスザクを除いたいつものメンバーは、元気な声と裏腹に目を真っ赤にさせ少し浮腫みの在る会長の様子に心配の声を上げた。それでもミレイはただの寝不足と一言で片付け、自ら書類を受け取り書類を纏めていく。

「ちよつ、会長」

普段なら他人に任せ自分はいくまでもやらないか、ギリギリになつてやり始めるはずのミレイが、今日ばかりは率先して行動してい

るミレイにみんな不安がる。さすがにそんなミレイの様子にバツが悪くなったのか、ルルーシュは立ち上がりミレイの元へと歩み寄った。

「か、会長」

「ん？ なぁにルルーシュ」

ルルーシュの方へ決して向かないミレイは、声だけで反応する。

「昨日は言いすぎました。実は――」

「すいません遅くなりました」

ミレイに対して言葉を並べていたルルーシュの声を遮ったのは、軍務を終えてせめて放課後だけでもという上司の言葉を受け急いでやってきたスザクの声だった。

「あ、ルルーシュ、今日は来てたんだ。昨日いれば一緒にゲームできたのに」

その話題はまずいと冷や汗をかくミレイは、こっそり顔をあげルルーシュの顔を覗きこむと案の定怒っているときの冷たい表情になっているのを確認する。

――スザク君：ほんと、たまには空気読んで

小さく聞こえないようにため息を吐いたミレイだったが、不幸はこのままでは終わらなかった。

「あれ？」

一瞬見えたミレイの目が赤い事に気づいたスザクは、素早くミレイの所へ移動しその頬を両手でそっと触れ、顔を上向きにさせる。

「会長、目が真っ赤ですよ。何かあったんですか？」

その行為にいち早く反応したのはミレイではなく、隣に立っていたルルーシュだった。

「スザク!!」

ミレイに触れているスザクの両手を、素早く弾くとミレイを抱きかかえるように強引に自分の胸元へ引き寄せた。何がなんだかわからない生徒会メンバーだが、一番状況がわかっていないのは胸元に引き寄せられたミレイであった。

——え？え？なに？

「スザク、どういふつもりだ！俺のモノに勝手に触れるな」

いつもの穏やかな表情と違い、憎悪を浮かべたその表情にスザク意外のメンバーは哑然とする。いつもは笑顔を浮かべているか、難しい顔をしているルルーシュであったがこんな怒りに狂う顔を見た事がなかった。

「どうしたのさルルーシュ。なんでスイッチ入っちゃてるの？」
「黙れ!!」

スザクがいつも通りマイペースな分、余計にルルーシュの変化が際立つ。ミレイの腰元を左腕で包み、右手はミレイの顎を下から掴む。右手の親指の腹で唇をゆっくりなぞりながら、ルルーシュは

ゆっくりとした口調でミレイに問いかけた。

「ミレイ、お前は誰のものだ」

表情は普通に戻ってはいいたが、声は若干ドスが効いている低い声。それに囁かれてミレイは不思議と体に火照りを感じていた。なぞられる唇に意識が集中し体が身震いを始める。

「んん!？」

答えを言わないミレイに業を煮やしたルルーシュは、強引にミレイの唇を自分の唇で塞いだ。いきなりの事に驚き、身じろいだミレイを押さえつけるように自信の舌をミレイの口内へと押し込む。体を硬直させたミレイは目を瞑りそのルルーシュの感触を味わわされたが、なんとか顔を横にそらし荒く息を吐いた。

「はあ…ルルーシュやめて!!」

「黙れ!」

ルルーシュの間近で聞く怒声に驚いたミレイは、ルルーシュの方へ視線を向けたまま体が固まる。

「ミレイ…もう一度聞く。お前は誰のものだ」

ふいにいつもの優しい声、それをたまらなく愛しいと感じたミレイは素直に口を開く。

「ルルーシュの…です」

頬を上気させ瞳を潤ませたミレイは、何の疑問も抱かず素直に言

葉を口にする。

「お、おいおい。何やってんだよルルーシュ。悪ふざけが過ぎるぞ」
慌ててルルーシュに歩み寄ったりヴァルがルルーシュの肩に手を触れる。

「離せ!!」

今まで見た事無いルルーシュの表情に、間近で聞く怒声に驚いたリヴァルは反射的にルルーシュから飛びのいた。

「俺のモノに何をしようと俺の勝手だ。お前たちにとにかく言われる――」

――俺は、な…何をやっているんだ。

衝動で我を忘れていたルルーシュが、ふとした瞬間に我に返り現状を確認する。特に変化が無いのは、本性を知っているスザクと腕の中に抱きとめているミレイの二人で、他全員がルルーシュに対し恐怖の念を抱いている事が表情からも見て取れた。

「あは、あははは。みんな今の事…昨日のゲームの事も忘れろ!!」

「すみません、会長。俺の部屋に書類忘れちゃって、一緒に取り行つてくれませんか？」

「え? ええ」

先ほどまでと脈絡の無い会話に、一瞬戸惑うミレイは回りのメンバーの様子を伺う。先ほどまでの怯えた様子は無く、みんな和気藹々しながら書類を片付けていく。

「ほんとにルルったら、おっちょこちよいなんだから」

「ほんとと授業中も寝てるし、ボケが来てんじゃないの？」

「それじゃあ会長、僕たちはこの書類をやってますから、ルルーシユの書類…お願いしますね」

——え？あれ？さっきまでの一体…夢？

あまりにも普通の反応のメンバーに疑問を浮かべるも、強く握られたルルーシユに引っ張られ生徒会室を後にした。生徒会ルームからルルーシユの自室までは近く割りとすぐに到着したのだが、その間一切会話は無くミレイの問いかけにも反応はない。ルルーシユの部屋に着き引っ張られるまま入られたミレイは、次の瞬間ベツトの上に押し倒されていた。

「きゃ……ちょ、ちよつとルルーシユ!？」

ベツトの上でルルーシユの下敷きにされているミレイは、じたばたと抵抗するも男の力に叶うはずも無く逆にベツトに強く押し付けられてしまった。

「ん」

先ほど見たく強引に唇を重ねられるも、今度は自らも積極的にルルーシユの舌を追いつめる。ガコンと何かが床に倒れた音を聞いた二人は、そちらの方へ視線を向けると割りと大きめなバックが床に倒れており、その中から飛び出た黒い仮面が目に入る。

「え？嘘…あれって」

それは世間を騒がしている人物、反ブリタニア勢力である黒の騎士団を率いる人物のつけている仮面と同じ物。それがこの部屋の床に転がっている。ミレイを押し倒す事に集中していたルルーシュは、片付けと中だったバックの事を失念していたのか自らの脚で蹴飛ばしてしまい、その結果今のような状況となった。

「そうだ、俺が…ゼロだ」

仮面が転がっていることに一瞬驚きの表情を浮かべたルルーシュだったが、すぐに冷静な表情を取り戻しミレイの上でニヤリと笑う。

「そう…、じゃあ私は殺されるのかしら？」

「そうだな…殺されない方法、ミレイならわかるだろう？」

悪どく迫い詰める笑みを浮かべたルルーシュは、ミレイのその瞳を自身の紫電の瞳で見つめる。

「ふふ、私で慰めればいいのね。ルルーシュを…そしてゼロを」

ミレイは観念したように全身の力を抜き目を瞑る。再びルルーシュの唇がミレイに重なると、押し寄せる波に体を震わせながら、ルルーシュを受け入れ包む。

「もう…私はあなたの人形よ。だからいつでもあなたの好きにしていいいわ」

その言葉に満足げな笑みを浮かべたルルーシュは、ミレイの来て

いる制服のボタンをゆつくりとはずしていく。それに抵抗する事無く、ミレイはただただ自身の纏う布地を薄くする。

「ふはははは。わかっているじゃないか、唯一殺されない方法を。ミレイ、俺のために全てを捧げる人形になればいいんだ。逆らうことは許されない」

この日から狂乱の宴が始まった。ミレイが望もうと望まないと、逆らうことは許されない。

もう彼の人形となった彼女には、拒否する権利などありはしないのだから……。

「あら？アーサー？」

クラブハウスの1Fのテラスで日向ぼっこをしていたナナリーは、自分の方に近づいてくる四本足の猫に向かって声を掛けた。呼ばれたのがわかったのか、少しだけ小走りになったその猫をナナリーの膝上に向かって飛び上がる。少しだけ驚いたななりーだったが、すぐまさアーサーを包みこみ、右手でその背中を優しく撫でた。

「どうしたのかにゃ？…一緒に日向ぼっこしましょうね」

その言葉に一言アーサーは「にゃ」と一鳴きすると、それに答えるようにナナリーも「にゃ」と鳴き一人と一匹は気持ちよさそうに午後の日差しを全身に浴びた。

上階では、絡み合った男女が荒い息を上げ、ベットに深く沈みこ

んでいる事など知らずに……

(後書き)

いかがでしたか？
こんなんでどうでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3992o/>

コードギアス Kingame of love and hate

2010年10月19日03時57分発行